

# 2020年(令和2年)万葉カレンダー





# 令和

時に、初春の令月にして

気淑く風和ぐ。

梅は鏡前の粉を抜き、蘭は

珮後の香を薫らす。

我が園に 梅の花散る ひさかたの

天より雪の 流れ来るかも

巻五 八二二 大伴旅人

令和の由来 梅花と大和三山



檜原神社 二上山を望む

まきむく  
巻向の 檜原ひばらに立てる 春霞はるかすみ  
おほにし思おもはば なづみ来こめやも  
卷十一 一八一三 柿本人麻呂歌集



平城宮跡 天平祭

春の園 その 紅にほふ くれなる 桃の花  
下照る道に したで 出で立つ娘子 いとめ

卷十九 四一三九 大伴家持



平城宮跡から春日山

かすが  
春日なる  
みかさ  
三笠の山に  
月も出でぬかも  
さきやま  
佐紀山に  
咲ける桜の  
花の見ゆべく

卷十 一八八七 作者未詳



高岡 堅香子の花

ものふの やそをとめ 八十娘子らが く 汲みまがふ  
てらゐ 寺井の上の うへ 堅香子の花 かたかご

卷十九 四一四三 大伴家持



桜井 梅雨の三輪山

卯の花を 腐す長雨の 始水に

寄るこつみなす 寄らむ見もがも

卷十九 四二一七 大伴家持



平城宮跡 天平七夕祭

彦星し ひこほし 妻迎へ舟 むか ぶね 漕ぎ出らし  
天の川原に あめ かはら 霧の立てるは きり

卷八 一五二七 山上憶良



賣太 (めた) 神社 (稗田) 阿礼祭

河<sup>かは</sup>の上<sup>へ</sup>の ゆつ岩群<sup>いはむら</sup>に草生<sup>くさむ</sup>さず  
常<sup>つね</sup>にもがもな 常<sup>とこをとめ</sup>処女<sup>とこをとめ</sup>にて  
卷一 二二 吹茨刀自



興福寺 中秋の名月

庭草にはくさに 村雨むらさめ降りて こほろぎの  
鳴く声聞けば 秋あきつ付きにけり  
卷十 二一六〇 作者未詳



斑鳩 法起寺

秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに  
君に寄りなな 言痛くありとも

卷二 一一四 但馬皇女



今朝けさの朝明あさけ 秋風寒し 遠とほつ人  
雁かりが来鳴かむ 時近みかも

卷十七 三九四七 大伴家持

大宇陀阿騎野 朝明と雲海



雪の唐招提寺

み雪降る 冬は今日けふのみ うぐひすの

鳴かむ春へは 明日あすにしあるらし

卷二十 四四八八 大監物 三形王